



「日本語研修に来た子供たちは東川が大好きになってしまつて、『東川で就職したい』というんです。だからこの町に雇用の場が広がることを期待しています」。こう話す次の計画は、台湾からの写真研修生の誘致、そして音楽合唱団のコンサート開催実現。「思った夢を口にすると、それが現実になるように、耳にした誰かが一緒に道を開いてくれる。そしてまた次の夢の実現につながっていくんです」。

「東川町で『写真の町』の次に来るものは環境問題。水処理、自然光発電はおもしろい切り口です。台湾で今関心が高いのは、エコタウン、バイオマスの分野。ある都市ではプロジェクトも始まっています」「教育と観光を結びつける切り口は、国によって違うけれど、台湾では今、社会人が日本語を学びたい、と考えている」と話します。

「長期滞在して東川の生活を楽しまたいという人が増えています。そのためには日本語研修とワーキングホリデーを楽しめる滞在環境が大切」です。

東川との積極的な係わりは、会社がラジオ番組のスポンサーになってから。アシスタントパーソナリティーとして番組にも出演し、番組をインターネット配信して、スカイプ

(映像、音声を相互通信できるソフト)で東川の情報を世界に向けて発信するようになったのが転機。そして「台湾の高校生を東川の写真甲子園にオブザーバー参加させてみたい」と考えるようになり、2年前から日本語研修の遊学生誘致が実現するようになりました。

台湾から来道したお客さまを町内に観光案内(6月26日、道草館で)



◇ 20歳から台湾の教育大学に留学して中国語を勉強。その後シンガポール大学在学中に会社の駐在所を開設して、2年間シ



東アジア交流促進協議会の第1回会議で(6月9日、役場大会議室)

ンガポール、タイ、インドネシア、マレーシア各国で営業と得意先の巡回をしました。

「15歳の時に家族旅行で行ったのが私と台湾とのご縁の始まり。成人式も台湾でした。青春時代の一番楽しい時を過ごすと、そこが第二の故郷のように大好きな場所になります。だから、将来は骨をうずめたいと思つている大好きな東川と台湾が繋がったのはとてもうれしい。人生で大切なものは人と人とのご縁です。それが私の財産。アドバイザーという立場をいただいたことで、今までの種まき活動がこれからの活動につ

ながつて花開き役立てばうれしい」。「台湾から留学生が来てくれることは、サケの放流と同じ。1回目に来た研修生が、今年また来てくれました。家族旅行や新婚旅行で戻ってきてくれる子もいます。ここで暮らした子供たちは、いずれこの町に戻ってきてくれます」。

大隅千晶さん/旭川市(台湾・台北市駐在)、エノ産業(東川町)台北駐在事務所長
旭川市出身、41歳。東川町交流大使、旭川観光大使。東川町東アジア地域交流促進協議会委員
海外アドバイザー8人のうちの一人(台湾)。北海道女子大学(現北翔大学)卒業。米国ポートランド・コミュニティカレッジ(オレゴン州)、国立台湾師範大学、国立シンガポール大学に留学。
シンガポール大学在学時にエノ産業シンガポール駐在を立ち上げて2年間駐在。27歳で帰国後、同社で通訳業務、その後一時大学秘書を経て現職。英語、中国語、マレー語に堪能。
高校時代はアナウンス部。初めて体験したアナウンスのアルバイト、旭川スタルピン球場ウグイス嬢(場内アナウンス)で「とてもおもしろかった」と、その後旭川、札幌のアナウンススクールで本格トレーニング。現在、旭川のコミュニティFMラジオ局、FMリバーの番組「コーシンのいっしょけんめい」で、旭川出身の放送作家、奥山コーシンさんのアシスタントパーソナリティーとしても活躍中(日曜日正午から3時間番組、第2、第4隔週で道の駅・ひがしかわ道草館から生放送)。